　　下村靖樹氏講演会「ルワンダ～ジェノサイドを超えて」

【自己紹介】

１９９２年に始めてエチオピアに取材に行き、それ以来１７か国くらい行っている。兵庫県姫路市出身、現在は東京在住。アフリカ取材は赤字なので年に１～２回行ければいい。ニュースではなく一度行った国の変化を追いかけていきたいと思い取材を続けている。ルワンダには１９９５年に初めて行き、可能な限り毎年行くようにしている。

【ルワンダという国】

ルワンダはアフリカ大陸の真ん中にある国。世界で三番目に大きい淡水湖ビクトリア湖が近くにあるが、面してはいない。内内立国で貿易にはコストがかかり、大きなネックになっている。ルワンダは１９９４年に１００万人が虐殺された事件があった。「ホテルルワンダ」という映画もある。（※ルワンダ虐殺については文末に解説）

【始めて取材した虐殺現場・教会の映像に関して】

１９９５年に始めていったときに虐殺現場の写真を撮った。当時２４，５歳。殺された遺体を見たことはなく、行く教会には１万体くらいの遺体があると言われていた。当時ジャーナリストとしては外部に発表する機会が少なく、「この写真を持っていけばどこかの雑誌社につかってもらえる。チャンスだ」と思った。それまでは「ジャーナリズムは正義のため。世の中をよくするため」と思っていたが、実際に行ったら自分の名誉のために使おうとしている自分に気が付いた。これでは一度殺された人を改めて殺したことになる。そのことに気づき自分の中で向き合わなくてはならないと思った。これがルワンダにかかわり続けている理由である。

【難民キャンプ】

虐殺の翌年１９９５年の難民キャンプの写真。ルワンダの隣国コンゴのミイラコンゴ山の国境沿いに難民キャンプがあった。写真には「難民は２４時間このキャンプの中にいなければならない。出てはいけない。」と書かれた看板がある。当時は難民と虐殺を行ったインタラハメイという民兵の区別ができなかった。実際にこのキャンプの中で襲撃事件が起きたり、手りゅう弾が投げ込まれたりした。誰が人殺しで誰が犠牲者なのかわからなくなっていた。

【１９９５年の首都キガリとその周辺】

当時のキガリはアフリカ特有の赤土が目立ち、高い建物はほとんどなく、「ホテルルワンダ」に出てくる「ホテルビルコリン」といわれる建物が見える。ルワンダは標高１０００メートルを越えるところもあり、赤道直下であるが日本の春秋のような気候。当時も車が走っていたが、まだまだ台数が少なかった。

少し郊外に行くと内戦時の銃痕が残っている。ルワンダの国土は四国や長野県くらい。そこに７００万人が住んでいてそのうち１００万人が殺された。そこらじゅうで殺戮があった。キガリの少し郊外や田舎に行くと壁という壁に銃弾の跡が残っていた。　　　　　　　　　（※千葉県人口６３０万人　千葉市人口９８万人）

【現在の首都キガリ】

ほぼ同じ位置からとったが、赤土が消えて舗装道路や高層ビルが立ち並んでいる。ルワンダは虐殺の前からアフリカで一番人口密度が高いと言われていたが、現在も人口密度が高い。家問題や土地問題が深刻化している。IT立国を目指しており、最先端でITインフラを整備している。日本のメディアが流すようなアフリカの飢餓や貧困とは遠く離れたところにキガリの若者たちはいる。渋谷の若者と変わらない。カフェも日本と変わらず、味もおいしい。「ビルコリンホテル」も建て替えられ名前も変わり高級ホテルとなっている。ルワンダは環境にもとても気を使っていて、ゴミもほとんど落ちていない。CO2対策で自転車の貸し出しもやっている。現在はアフリカで一番安全な国。夜、道を歩くことも車で移動して写真を撮ることもできる。

【最初に訪れた虐殺現場の教会・現在の姿】

最初に訪れたのはニャルベー教会。ルワンダ南東部、タンザニア近くにある教会。２万人近くが亡くなった。ジェノサイドが始まって2日後にはこの教会でも虐殺が始まっていたといわれている。地元の人たちの寄付によって補修され残っている。ここで虐殺があったということを記憶にとどめるため、柱という柱に当時の様子が描かれていた。自分の原点であったがなかなか足を運べなかった場所。大聖堂もきれいになり、遺体が山積みになっていた中庭もきれいになっていた。この地区で殺された方は５万人と言われている。遺体の損傷が激しく身元が分からない人は一つの棺に何体かの遺体が入り、名前が記された。

【虐殺から２年後の難民の帰還】

国外から難民たちが帰ってくるときの写真。難民というと被害者のイメージが強いが、ルワンダの難民はそう言い難い。インタラハメイ（民兵）もこの中に混じっている。民兵に扇動された一般の人たちが隣人を殺しているケースもある。帰国してくる難民の中には人を殺した人が混じっている。強制的に追い出されてルワンダに帰ることになったのだが、虐殺から２年しかたっていないのに戻るのは、帰る側（フツ、虐殺した側、負けた側）も恐怖だし、迎え入れる側（ツチ、殺された側、勝った側）も恐怖。表情には笑顔がない。国境を超えるところは兵士が管理している。

この時はタンザニアから３０万人が帰ってきた。みんな頭に物を乗せている。頭にのせたほうが手で持つよりはるかに重いものを運べ、手も空くので日常的に頭にのせて運ぶ。２年間難民キャンプで暮らしてきた全財産が頭の上に乗っている袋だけ。

ルワンダの国旗も２００１年に変わった。それまではツチとフツという民族名がＩＤカードに書いてあったが、今は民族表記はなく全員「ルワンダ人」となっている。

【母と子がひもでつながって歩いている】

難民が帰る時や移動するときは突然混乱が起きたり、軍が攻撃してきたり、パニックに陥ったりすることがある。そんな時にはぐれないように子どもをひもでつないでいる母親がたくさんいた。

【難民帰還の動画】

川の向こう側がタンザニア、こちら側がルワンダ。橋が国境で渡りきるとルワンダ。

帰ってくる人に笑顔はない。国境の端から上り坂を１０キロ行くとトランジットキャンプがある。そこで難民の人たちは食糧の配布を受けることになっている。

歩いて帰る難民に対して国連高等弁務官事務所（UNHCR)が車を準備していたが、一番体力のある強い若い男性たちが乗っ取ってしまった。年配の人や女性や子どもは歩いて帰ることになった。

【トランジットキャンプ】

食糧が配られていた。食糧を受け取った後、どの地域に住んでいたかを報告しその地域ごとにバスやトラックが準備されていて送り届けられることになっていた。

自分が住んでいたところに戻るということは、万が一、自分が人を殺していたら自分の殺人現場に戻ることになる。戻るほうも怖いし迎え入れるほうも恐怖。難民の帰還は夜になっても続き、歩いて帰ってくる人の大半は年配の人か女性だった。

【日本の支援】

日本の支援は届いている。日本の乾パンが配られていた。乾パンの中の氷砂糖を舐めたときの子どもたちの表情を見ると、これが心の安定に役立っているのかなと思った。トラックも日本の支援で用意されている。外務省のホームページにもでていないし、日本人はほとんど知らないが、ルワンダの復興に日本の支援は意外と届いている。

【難民帰還後】

虐殺した側のフツの人たちが帰還した後、街中で「あの人が人殺しをするのを見た」と証言があったりして、捕まる。虐殺に加担したといわれる人が１２万５千人いた。その人たちをどう裁くか。

当時のルワンダの人口４,５００万人のうち弁護士は6人しかいなかった。どの国でもそうだが、虐殺の最初のターゲットは、弁護士や教師など何かを伝える力や変える力がある人。多くの弁護士が殺され、国外から戻ってきた人を入れても６人しかいなかった。これでは何もできなかった。

政府が選んだのが「ガチャガチャ」という村裁判。以前から村の中で話し合いをして賠償を決めたり罰則を決めたりしていた制度。村のいたるところでガチャガチャが行われた。犯人の犯した罪によって刑の重さが変わり、一番軽い人は村に残ってボランティア活動をした。直接人を殺した人は刑務所に入れられた。

１０万人以上が刑務所に収監されていた。キャパシティーがなく刑務所の状態もひどかった。

刑務所の中を取材しようと思っていたところ１６歳の女の子のインタビューをさせてもらえた。その子は１２歳の時に友達２人を殺した。自分はフツで友達はツチ。友達を自分の家でかくまっていた。それを民兵に見つかり「なんでツチの人間をかくまっているんだ。ツチの子どもたちは１００％死ぬ。私たちが殺す。お前が友達２人を殺すなら、フツの人間として認めて生かしてやる。」と言われた。見つかった段階で友達２人の死は確定している。自分が２人を殺せば自分は生き残れる。殺さなければ自分も死ぬ。本当にあり得ない選択をさせられた。ナイフで刺せというなら、抵抗があったかもしれないが、手足を縛って川に突き落とすだけでいいと言われた。直接血を見るわけでもなく、助かるかもしれないという変な希望を与えた。彼女は２人を殺し、それを見ていた村人たちに告発されて刑務所に入れられた。彼女にインタビューをしたが、不遜な態度だった。自分を肯定しないと自我が崩壊するのだろう。別れ際に彼女に「私は何をすればここにいなくて済んだの？」と言われた。彼女には選択肢はなかった。

自分がその立場であったら友達を殺していただろう。そこで一緒に死のうと考える人ももちろんいるだろうが、彼女と同じ選択をするだろうと思う。私は大人で、いろいろな選択肢を考えてそれを選択できる。しかし、彼女は12歳でその選択をさせられた。彼女が刑期を終えて刑務所をでても彼女は将来ずっと殺人者と言われ犯罪者である。でも彼女も被害者のはず。そのような人が数万単位でいる。そうなるとこの人たちの救済なんでできない。第三者はこの教訓を次に生かせばいいと言えるが当事者にはできない。

当事者は自分の人生が後戻りできない状態になった。それがルワンダのジェノサイドだったのだろう。彼女のインタビューをしたこと、虐殺の現場を見た時の自分のきもち、これからどのようにルワンダと向き合ったらいいかと悩んでいたが、その時に出会ったのが、お豆腐屋さんだった。

【ルワンダの豆腐屋さん】

１９９８年に「なんでルワンダに豆腐屋さんがあるのですか？」という記事を書こうと思って取材に行った。

豆腐会社のオーナーはマドレーヌさんで、ジェノサイドの時はカナダに留学中だった。ジェノサイドが終わり帰国し、自分に何かできることがないかと考えた。カナダで豆腐の存在を知っていた。

豆腐は捨てるところがない。この国にも大豆があって、にがりさえあれば豆腐が作れる。栄養失調児がたくさんいたので豆乳を飲ませたり、おからでクッキーを作ったり、家畜の飼料にしたり庭の肥料にしたりできる。豆腐をルワンダで普及できないかをフランスのNGOに相談して支援を受けて豆腐屋を始めた。

【ルワンダの豆腐料理】

豆腐を作っているところ。おぼろ豆腐。おから。使っているのが絹ではなく「かや」なので「かやごし豆腐」。日本の豆腐はさいの目に切ったら倒れるが、やわらかいと食べた気がしないということでルワンダの豆腐は水分を抜いたカチカチな豆腐。

トマトソースベースの豆腐料理でピーマンなど野菜と煮込んだものや日本のバナナと違う甘くないバナナと煮込んだものをグリンピースやポテトと一緒に食べたりする。

【コロンべとの出会い】

ここでコロンべと出会った。

マドレーヌが豆腐屋をやりながら、孤児院の手伝いをしていた。孤児院は友達が運営していたらしく、たまたま孤児院の門にこの子が捨てられていた。ルワンダでは性暴力も多くあった。カトリックでは堕胎ができない。性暴力でできた子どもでも堕胎できない。当時数万の孤児がいた。

この子の笑顔がかわいいのでマドレーヌがコロンべをつれて帰ってきた。

豆腐工場と自宅が同じところにあり、最初は豆腐の取材に行かせてもらったのだが、そこにコロンべがいた。戦災孤児の子なんだが、この笑顔がすごくかわいかった。コロンべの笑顔で救われた。この子の成長を通して、ルワンダを見ていけばいいのかな、と思った。

【コロンべと家族の写真物語】

１９９８年の写真。アフリカで取材するときにつらいところなのだが、最初に写真を撮った時は「全員が天涯孤独で疑似の家族を作っている」と聞いてすごいなと思った。しかし、次に行ったときには「コロンべは戦災孤児だが、他の人は全員家族」だった。ひどいときには名前も変わっている。何回聞いても「そうだそうだ」と言って、次に行ったときは「いやいやそんなこと言ってない」となる。

工場の経営などで問題があったらしく、マドレーヌはイタリアに出稼ぎに行き、そこでもいろいろあったらしく従業員だったテレサが豆腐工場を引き継ぎ、その後も何かあったらしく最終的には豆腐工場は別な人のものになり、テレサがコロンべを育てることになった。経済的に厳しい状況になってもコロンべを手放すことがなかった。

当時、この家には電話もなかった。翌年この家を訪ねてみて家族がそこにまだすんでいることが初めて分かる。１回引っ越した時はどうにか見つけられた。テレサは看護師で頑張って、家族を支えたので大きな引っ越しをすることもなく、家族を守っていった。

コロンべはテレサの家族の一員となって成長した。幼馴染は南アフリカでプロサッカー選手になった。テレサの長女に子どもが生まれ、コロンべも反抗期が終わって笑ってくれるようになった。家族が増えたり減ったり、家族の歴史を取らせてもらっているのはありがたいなと思う。

コロンべは内戦孤児だが、テレサのおかげで家族の一員になれている。笑顔にくったくはない。

最初は心配だったので「コロンべに何かあったらこれを使いなさい」と少しだけお金を渡していたのだが、多分それは自分の遊びのために使っていると思う。コロンべにとっての甥っ子姪っ子がどんどん増えていき、家族写真はどんどん変わっている。

コロンべが結婚して子どもを産んで家族ができたら、それを最後の１枚にしようと考えていた。コロンべはある意味ゼロから生まれてきた。そのコロンべが子どもを産んで家族が作れるのであればゼロからイチが生まれるのではないかな。これは、ルワンダの人類の可能性かなと考えていた。ところがこれが思った通りには行かなかった。親戚のクラフトショップで働き始めたときは「あの小さかったコロンべが働き始めて」とうれしかった。現在は転職して病院でデータ入力の仕事をしている。データサイエンス系の仕事がしたいと大学にも行っている。パソコンがないからというので買ってあげたが学業が進んでいるようには思えない。仕事も行っているが、家族の世話をしているのがメイン。結婚して子どもを持つというのは無理かなと思っている。

初めてこの家族に会って25年たって、みんなが笑顔で笑っている。ルワンダを撮り続けていて（どんな形でルワンダに関わっていけばいいかと悩んだが）この家族の写真を撮れていることが僕の答えかなと思う。

【ルワンダを撮り続けての感想】

難民がもどってきてから３０年間殺し合いがほとんど起きていない。ツチとフツが以前と同じように同居している。ボスニア・コソボは分かれて住んでいる。ルワンダの人も最初はやせ我慢だったが、政府の締め付けがきつかったのでできたのだと思う。

しかし、25年26年続くとそれが普通のことになっていて、いいことか悪いことかは別として、虐殺のことを深く考えていない。ツチ・フツという思いは全くない。同じルワンダ人という意識に変わってきている。これは大きな成功だと思う。

（虐殺のことは）年配の人は心の中にある。刑務所に入っていた女の子は忘れられない。しかし、それ以降に生まれてきた子どもたちは「虐殺って何のこと？ああ、そんなことあったよね。」そのくらいにしかとらえていない。それがこの国にとってどう作用するかはわからないが、時間がたてば人は憎しみを塗り替えていけるというのが、この家族を見て思う。

世界中で紛争が起きている。ウクライナ・ロシア、パレスチナ・イスラエル、スーダン、コンゴ、などで問題が起きている。インターネット上でもお互いを非難しあっている。

アフリカを取材していて生まれてずっと悪人の人は会ったことがない。最初から悪人はいないのかなと思う。

驚くほど善人にたまに会う。ルワンダで家族を殺され、性暴力を受けてその子どもを育ててそれでも人を信じる人がいたりする。残酷なことが９９％あっても残りの１パーセントの善は人間から消えないのだなとルワンダ、アフリカ取材を通してそう感じている。

ルワンダが今後どうなっていくか。内内立国で経済的に国を成り立たせるのが難しい。それでも国内は笑顔を作れる状況が続いている。ジェノサイドから３０年たって殺し合いが起きていないというのはすごいこと。わたしたちが学ぶこともある。

※ルワンダ内戦

ルワンダは１９世紀のアフリカ分割にてベルギー領となった。もともとルワンダにはツチ・フツという２つの民族が存在していたが、二つに明確な区別はなかった。しかし、統治するベルギーによって、二つの民族は明確に区別されるようになった。

ベルギー人はヨーロッパ人が植民地主義などを支持するために作り出した「ハム仮説」にのっとり、ツチ族はアフリカに文明をもたらした「ハム人種」、フツ族は下等な「土着人種」としてツチ族を優遇した。

しかし、第二次世界大戦後、ツチ族との関係が悪化したベルギーは、フツ族を支持するようになった。

ベルギーに支援されたフツ族は今までツチ族がついてきた様々な要職を奪うとともに、これまでの報復としてツチ族を虐殺するようになった。この時に国外に脱出したツチ族の難民が設立した反政府組織「ルワンダ愛国戦線」によって、１９９０年にツチ族とフツ族の内戦が勃発した。これがルワンダ内戦である。

1993年にルワンダ政府とルワンダ愛国戦線は和平協定を結んだが、翌年、大統領の乗った飛行機が撃墜される事件が起きる。これにより一時は和平に向かった対立は再び激化した。

そしてフツ族の過激派がツチ族を撲滅するための虐殺を始めた。彼らはラジオなどを使って「年齢性別に関係なくツチ人を皆殺しにしろ」と民間人を扇動し、「これに賛同しないものはフツ人でも殺しの対象にする」とした。その結果、100日間で約100万人もの犠牲者が出た。これがルワンダ虐殺（ジェノサイド）である。

最終的にはルワンダ愛国戦線がルワンダ軍を撃破し、ルワンダ内戦とルワンダ虐殺はこれで終結した。